



TEL 076-6125155  
FAX 076-6125150  
E-mail info@krisouten.com

平成十七年九月二十日  
〒九三二〇八〇  
高岡市閭屋町四十  
有限会社 沖商店発  
2015.9.20

いつもお世話になりありがとうございます。

『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょうか』そんなことを皆様と一緒に考えたい。そして皆様の意見を頂きたい。そんな思いで本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚の無いご意見をお寄せくださいます様お願い申し上げます。

一 衆議院議員選挙が終わって

先に衆議院で可決された『郵政民営化法案』が、参議院で否決され、小泉首相は衆議院を解散しました。それに伴い第四十四回衆議院議員総選挙が八月二十日に公示され、九月十一日の投票で行われました。結果はご承知の通り小泉自民党の圧勝となりました。小泉自民党は四百八十議席中、二百九十六議席獲得しました。この結果は、小泉首相はじめ自民党幹部も予想しなかったできごとだったと思います。そうであれば、比例区東京でもう一議席獲得できたのに、何故もう少し予備候補を列挙していなかったのかなと思います。

小泉首相の尊敬する人は『織田信長』と報道されてきました(ちなみに、民主党岡田代表も尊敬する人の一人に『織田信長』を挙げています)。

今回の衆議院選での小泉首相はまさに『織田信長』的のものでした。即ち、小泉首相は、命(政治生命)を賭けて今回の勝負に出ました。「勝つか負けるか」乾坤一擲、それはまさに『織田信長』が「桶狭間」へ突入した時の心境と同様なものであったと思います。

かたや民主党岡田氏からは小泉首相ほどの迫力が感じられませんでした。今回の選挙戦を『郵政民営化法案』一本ではないことを訴えるため、やれ福利や消費税や一般的な主張に終始し、焦点を絞ることができないままの戦いぶりでした。

また、『郵政民営化法案』に反対の立場を採ったこと

から、自民党族議員同様、改革に反対する者と見られ大敗しました。

今日の日本の「政治家」は国会で芝居をする役者です。いや、役者ならまだよろしい、自分の意思意志も魂も無く、他人(役人)におどらされてる「浄瑠璃人形」と揶揄したい心境です。

私は、そんな今の日本の「政治家」と言われている「浄瑠璃人形」ばかりの中で、小泉首相は、少しは骨のある者ではないかと思っています。そして、今回、小泉首相率いる自民党の大勝利は、そんな私の思いと同じ思いを持った人達が、小泉首相に『改革』を期待した結果ではないかと思えます。従って注目すべきはこの後です。

今回の選挙は、『郵政民営化法案』だけを焦点にしたものでしたが、これはあくまで小泉首相の選挙戦への手法のひとつであり、『郵政民営化法案』の可決だけ終わらしては困ります。

『郵政民営化法案』の可決は改革の第一歩であって、今後、大鉈を振ってどんどん改革を進めて行つて欲しいと思います。

独裁政権になるのではないかと心配する方もおられますが、今日の「役人天国日本」を改造するにはそれを恐れてはいけません。今ここに折角出てきた改革の芽を摘んではいけないと思います。

小泉首相が素晴らしい政治家かどうか私には分かりません。只、今日の政官癒着のどろどろな状態を、少しでもさらさらにするためには、多少の副作用は覚悟しなければならぬと思つています。「毒を制するに毒をもつて為す」です。

ついでに私が小泉首相にどうしてもやつて欲しいことを述べたいと思います。それは、『首相公選』です。行政のトップ、内閣総理大臣は国民全員の直接選挙で選ばせて頂きたいのです。

議院制民主主義などといって国会議員だけで内閣総理大臣を選ぶシステムになっているから、選ばれた総理大臣は国会議員に遠慮するのです。国民全員の直接選挙で選出された総理大臣なら、誰にも遠慮がいりません。

そして立法国会と行政内閣が完全に独立した政治体制になれば、国会議員の干渉を受けることなく公平・簡素な行政が行われるのではないかと思います。

二 随筆紹介

小学二年生のときでした。そのころ、学校から帰

宅して一休みすると、先生の家に勉強をしに行くことになっておりました。塾などまったくない時代のことです。

友だちが「遊ぼう」と誘ってくれても、その時間がない。そこである日、迷案?が浮かんだのです。先生の家へ行ったふりをして友だちと遊び、いつもの時間に帰宅すれば母親にはわからない。そう考え

てさっそくそれを実行に移しました。ところが楽しく遊んで帰ると、母親がたいそうな剣幕で怒つたのです。うまくごまかしたつもりでしたが、子どもの浅知恵で肝心の先生のことを忘れていたのです。先生から家に「おたくの子どもさんがこない」と連絡

があつて、すぐに嘘がバレてしまいました。そのとき母親が裁縫に使うものさしで私をぶつたのですが、鞭以下ムチのようにしなう長いものさしで、座敷のテーブルのまわりを逃げまわる私をビシビシ叩くものだから、その痛かったこと痛かったこと。

夜になってそのことを父親に話すと、父が「それは愛のムチだ」と言いました。まだ凍たれ小僧の私には「愛のムチ」などと言われても、なんのこともや

らわかりませんでした。叩かれたときの痛さと『迷案』の結末だけは今でもよく覚えております。

後年、英国では学校の体罰用に使うムチが売られていると聞いて驚いたものですが、英国では現在も教育の現場では使われていると思います。ケーン(Cane)と呼ばれる籐製のムチで、悪い生徒を懲らしめるためにそれで手やお尻を叩くのです。

日本では学校教育法に体罰の禁止がありますが許されません。なかには愛のムチ的に厳しく叱る先生もおられるでしょうが、親がすぐに「担任を代える」と校長に電子メールで文句を言い、ときには教育委員会にまでクレームをつけてくるといひます。

ギリシャ・ローマ時代には教育と体罰は同義語のように使われていたといひますからずいぶん厳しい教育法だったと推察されます。現今の日本の親は子どもが文句を言わず学校に行ってくれさえすれば言うことではないと、過度に子どもに気を使うケースが多々見受けられます。しかし、小さいときには子どもを厳しく叱り、矯正することも必要だと私は思うのです。

ところで、英国の話ではありませんが国によっては刑罰としてムチ打ち刑が存在します。これはいへんな痛みとともに肉が裂けることもあつて、大の男でも悲鳴をあげるといひます。囚人のなかには刑

期が延長されてもいいからムチ打ち刑だけは勘弁してほしいと嘆願する者さえいるそうです。ムチといえば、競馬の本場の英国ではレース中に騎手が馬にムチを入れるのは七回までと聞きました。生徒のムチ打ちを認める英国が馬の場合は七回以上ムチを入れてはいけないというのですから、不可解です。

ヨーロッパ人は日本人が雀のような小さい鳥を焼いて食べるのを「なんと残酷な」と言うそうです。かつて焼き鳥といへばチキンではなく雀だったのですが、それにしても豚の丸焼きを食べる連中が、小鳥が焼かれて食べられるのをかわいそうだというのですから、これも私にはわかりません。

テレビで日本の競馬のレースを見ておると、騎手はゴール間近になると七回どこか激しくムチを入れていきます。「もっと速く走れ」とさかんにムチを使うゴール直前の競り合いを、実況中継のアナウンサーも「叩き合い」という言葉で伝えています。

英国の競馬ではムチを入れた跡がミミズ腫れになった場合は処分の対象になるともいひれますが、そのように護られる馬に比べて、日本の相撲部屋の稽古風景を英国人が見たらどう思うでしょうか。激しい稽古のすえに地面にへたりこむ力士を兄弟子が一喝して竹刀で叩くことでもあります。相撲は体で覚えるものですが、このくらいのことにはあたりまえなのです。英国人が見たら腰をぬかすかも知れませ

ん。

しかし、もつと気の毒なのは日本の旦那さんたち

かも知れません。昼食代を五百円以内に抑えようと必死に努力しているのに、奥さん方は、お友だちとレストランで「うちの主人は洗濯物をたたんでくれるし、食事もつくってくれるの」「あら、お買い得なご主人だったわね」などと楽しい会話をしながら、コース料理を召し上がる。男尊女卑は今では「男損女肥」と書くのだそうですが、言い得て妙ですな。

数年前、稼がが悪いと就寝中に女房にバットで殴り殺されたご主人がおりましたが桑原、桑原桑畑の中にいると落雷の直撃にあわないう呪文。念のためです。

校成出版社(立正校成会)『校成』九月号より

「心の回転椅子」ムチ 竹村欣三校成出版社相談役  
有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘

個人メール E-mail 062525@krisouten.com  
にこにこ通信への意見をはじめ個人的な連絡は「ちひへん」まで